

史料報

第 63 号
平成 7 年 9 月

現状記録論と調査・研究

吉田 伸之

1

一九八〇年代の半ばに国立史料館のスタッフによって、「文書館学的記録史料整理論」が提唱されて以来、この一〇年の間に歴史資料の調査・研究に携る多くのの人々にとって、「科学的で厳密な史料の調査や保存のための方法を模索」することはほぼ共通の関心事となったように思われる。筆者も、それほど豊富とはいえない史料調査の経験をおまえて、勤務先大学でのゼミ、千葉市史編纂室、房総史料調査会、千葉県史料研究財団などでの活動を通じて、多くの友人の方々と議論しながら、史料調査の方法や理念などについて考えてきた。そしてこれを「現状記録論」として定式化しようと試み、これまで次の三つの小論で自分なりの見解を表明してきた。

a. 「現状記録の方法について」、『紙魚之友』九、一九九〇年三月。

b. 「現状記録論をめぐって」、『近世房総地域史研究』東京大学出版会、一九九三年。

c. 「史料細胞現状記録の方法について」、『千葉県地域史料現状記録調査報告書』一、千葉県、一九九五年。

そこで述べた内容はくり返さないが、「非・文書館学的なフィールド・ワークの方法」としての現状記録論について、最近では賛否ともどもいくつかの反応がみられるようになり、また現状記録論をベースとする史料調査報告書も刊行されはじめた。(例えば、前掲「千葉県地域史料現状記録調査報告書」一「安房郡九山町石堂謹司家文書」、大阪府和泉市教育委員会「旧和泉郡黒鳥村関係古

目次

現状記録論と調査・研究……吉田伸之(1)	報告「収蔵史料の修復に関する研究」研究会……青木 睦(10)
保存科学をめぐって……二宮修治(4)	神戸家所蔵犬山屋神戸家文書の保管容器について……渡辺浩一(11)
ロンドン大学におけるアーキビスト養成課程……森本祥子(7)	受贈図書……(12)
報告「史料管理学の体系化に関する研究」準備研究会……安藤正人(9)	兼報……(15)

文書調査報告書」など) 小稿では、この紙面をお借りして、史料調査法をめぐる論議に関する若干の私見を述べることとしたい。

史料調査の方法について語られるとき、論者が自らの経験に裏うちされた自説に強くこだわる傾向があるように見られる。歴史研究の学説に関してばかりに謙虚であっても、研究の前提としての史料調査の技術論等になると、他者の言説に耳を閉ざしあるいは曲解しつつ自説に固執することがみられるのではない

2

か。ここにはある種の古文書フェティシズムの匂いを嗅いでしまう。自らが「発見」し、あるいは心血を注いで調査にとりくんだ古文書群——あるいは自分自身が消費した時間と労力——への愛着が生ずるのは当然であるが、これが独善的なフェティシズムへと傾斜しかねない背景の一つには、史料調査の有す多義性・多面性に対する認識が欠けていることがあるのではないか。以下、史料調

査の多様性・多面性、史料調査と研究、の二つの問題をとりあげて、現状記録論とどう関わるかについて少し考えてみたい。

史料調査と一言でいっても、調査の主体、目的、調査地の条件等によって実際にはきわめて多様である。「現状記録法は研究を排除し、ストックな姿勢で史料整理のみを自己目的化している」、「豊富な器材、調査参加者の高い動員力など、めぐまれた条件があるところしか適用できない方法である」等の「批判」の多くは、こうした多様性についての注意を欠いている点で共通している。

まず調査主体について考えると、I個人、II集団、に二分され、またIIは、a自治体史編纂室や文書館、b大学・研究所のグループ・あるいはゼミ、cボランティア・グループ等からなるのが現状であろう。また調査の目的としては、①個人研究、

②共同研究、③自治体史の編纂、④所在確認、⑤保存措置、⑥教育(調査法や古文書読解について)、等に区分されるだろう。また調査地の条件という点では、⑦所蔵者(団体)宅で行なうフィールド・ワーク、⑧所蔵者宅近辺の施設に搬出して行なうフィールド・ワーク、⑨調査者の手元(編纂室、文書館、研究室、自宅)に搬出(寄託・寄贈・買得等を含む)して行なう館内作業、等に行なわれよう。右のうち、目的については通常①⑥のうちいくつかの複合から成りたつ場合が多いと思われる。これらの組合わせによってそれぞれの史料調査が実施されるわけだが、これに、作業者(グループ)の能力、動員力、器材や資金の条件、所蔵者側の諸条件等が加わることによって、一つ一つの史料調査はきわめて個性的・特殊な環境の下におかれるのである。つまり、いま自分が述べようとする史料調査の方法論は、どのような特殊性を有したものであるか、十分に認識した上で議論すべきであろう。このように考えると、拙論a・cでのべてきた現状記録論は、調査主体は主にボランティア・グループ(房総史料調査会)、大学ゼミ(千葉大、東大)、自治体

史編纂室(千葉市史、千葉県史料研究財団)などの集団レベルが中心であり、調査目的は③・⑤・⑥を主にし、また調査条件としては大半が所蔵者(団体)宅で実施し、資金はないが人員は(初心者も多く抱えつつ)豊かであるという等の点に特殊性を帯びた史料調査活動の中で検討し考察されてきた方法・理論であるといえる。それぞれの集団内の民主主義機会均等を重視するという点で、個人的なレベルでの古文書フェティシズムは育ちにくかったが、一方で、研究への欲望充足という点で比較的スティックとなり、調査活動を自己目的化する傾向が少なからずみられたといわざるをえない。

3

そこで次に史料調査と研究の問題について考えてみよう。前述したように、ここでも史料調査のタイプによって細かく検討する必要があるが、いろいろなケースの存在にもかかわらず、研究者として守らねばならないモラルや、また最低限実施せねばならない作業があるということを考える必要があると思う。

例えば、ある個人や少数の集団が、特定のテーマをもって史料を求める

内、相当量の未整理史料群に遭遇してしまつたとする。極度にスティックな立場からすると、テーマにかなった史料をぬきとりの撮影したりするのは論外で、改めて十全な準備を整えた上で、現状記録に着手し、これが一定程度進行した段階で、はじめて史料の採集(撮影や筆写による)を行なうべきだ、ということになる。

私自身もそうに考えたこともあるが、最近では次のような方法を施せば、「ぬきとり」もかまわないという立場である。(この点は、一九四四年九月日本史研究会例会における安藤正人氏の発言に大きな示唆を得たものである。)

①未整理文書の伝来の概要を、ビデオ、写真、スケッチ、メモ等で必ず記録すること。

②史料のぬきとりの採集にあたっては、伝来の状況を可能な限り破壊しないようにし、撮影等終了後は旧状に戻すこと。

③史料所蔵者に対しては、「ぬきとった」史料だけが価値のあるものなのでは決してなく、史料群全体の保存が大切なことを強調し、そのための必要最小限の手段を説明すること。

①の具体的な方法については「牛久

市小坂・斎藤家文書概要調査報告書」(茨城県牛久市史編さん委員会、一九九三年)における「概要目録」の理念と方法が参考となる。この作業にあつた神山知徳氏はこの方法を「史料群の保存状態を凍結し記録する方法」と表現している。私はこれを「フリーズ・ドライ方式」等と呼んでいるが、簡略乍らも、フィールド・ワークで誰もが行なえ、また、未来の人々へのモラルとしてもとりくまねばならない作業領域ではないかと思う。

一方、この問題でむづかしいのは、特定の研究テーマとは関係なく、ボランティア・グループや大学のゼミ等によって集団的に実施される史料調査の場合である。私自身かつて拙稿aで次のように述べた。(現状記録の方法を深めるうえで)「論点は、史料群の内容的研究を伴ってはじめて深められるものであることを強調したい。研究なき史料調査活動は、早晚形骸化し、質の低下を招くのは必至であろう。」渡辺尚志氏との共編著『近世房総地域史研究』(前掲)は、房総史料調査会というボランティア・グループにおいて、歴大な史料調査活動と、「微々たる研究」という相剋の打破をめざして企画され

たものでもあった。所与のものとしての研究テーマがあった訳でない場合、史料調査の過程で個人が発掘した論点をどう尊重し、相互に育て

あい、研究として実らせることができるか、なかなか微妙なむずかしい問題であろう。この点でのモラルとして、一つには中心部隊——その

多くは史料群の第一発見者——のプライオリティが守られるべきだということと、二つには、口頭のもので

はあつても他者の言説・論点は充分尊重されねばならないという点が強調されるべきだと考える。

* * *

以上、現状記録論と調査・研究について雑駁な感想を述べた。このほか、史料調査における「教育」の問題、また阪神大震災による被災史料救援活動における作業方法との関連など検討したい論点はいくつかあるが、これらについては別の機会に考えることにしたい。

受贈図書 平成六年度 (二)

(一)内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。

山形県教育史 通史編下巻 [山形県教育委員会]

寒河江市史編纂叢書 第47・48・49集 [寒河江市教育委員会]

白沢村史 通史編 [福島県 白沢村] 福島市史資料叢書 第63輯・第64輯 [福島市教育委員会]

茨城県史料 中世編V・近代政治社会編V [茨城県立歴史館]

新編高崎市史 資料編4 [高崎市] 上野国寺院明細帳 1 [群馬県文化事業振興会]

与野市史別巻 井原和一日記IV [与野市] 上尾市史 第四巻 [上尾市]

川里村史 資料編1 [埼玉県 川里村] 埼玉県史料叢書 1 [埼玉県]

鳩ヶ谷市の文化財 第十七集 [鳩ヶ谷市教育委員会]

板石塔婆の石の証人たち [埼玉県立歴史資料館]

絵にみる図でよむ千葉市図誌 上巻・下巻 [千葉市]

習志野市史 第四巻 [習志野市]

流山市史 近世資料編IV [流山市立博物館]

いま野栄をふり返る町制四十周年記念誌

[千葉県] 野菜町 [香取郡書集成 第三・四・五巻 [香取神宮社務所]

船橋市郷土資料図録 11 [船橋市郷土資料館]

茂原市立木高橋家御用留 第二集 [茂原市立図書館]

茂原の古文書史料集 第一集 [同右]

武蔵野市史 続資料編八 [武蔵野市]

武蔵野市百年史 資料編I上・下 [同右]

田無市史 第四巻 [田無市市史編さん室]

北区史民俗編2・資料編古代中世1・現代行政編・都市問題編 [東京都北区] 文化財研究紀要 別冊第六冊・第七冊 [同右]

郷土資料館資料シリーズ 第33号 [八王子市市郷土資料館]

東京市史稿 市街篇第八十五・産業篇第三十八 [東京都公文書館]

小平市三〇年史 [小平市]

小平市史料集 第二・三集 [小平市中央図書館]

多摩東京移管前史資料展史料集 [小平市]

世田谷区資料叢書 第九巻 [世田谷区教育委員会]

[世田谷区教育委員会]

かつしかブックレット 4 [葛飾区郷土と天文の博物館]

葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報告 第4集

足立風土記資料 古文書史料集2・寺社

1・地誌2・民俗3 [足立区立郷土博物館]

江戸町方書上 [東京都港区区立みなと図書館]

羽村市史料集 1 [羽村市郷土博物館]

里正日誌 第9巻 [東大和市教育委員会]

武蔵村山市文化財資料集 十一・十二 [武蔵村山市教育委員会]

豊島区地域地図 第6集 [豊島区立郷土資料館]

江戸東京の諸職 上・下 [東京都教育庁]

大悲願寺所蔵文化財調査報告(上) [同右]

東京都教育史 通史編一 [東京都立教育研究所]

大和市史 6 [大和市]

鎌倉市史 近代通史編 [鎌倉市]

横浜市史II 資料編4 [横浜市]

伊勢原市史資料編 続大山 [伊勢原市]

海老名市史 3 [海老名市]

寒川町史 2 [神奈川県 寒川町]

保存科学をめぐる

—保存科学における保存環境の調査について—

二宮 修治

はじめに

平成五年四月から史料館に史料管理研究室が新設され、史料管理学の体系化の一分野を担う「史料保存学」について、史料を保存し活用する保存環境において、史料を劣化・損傷から保護し、修復する理論と技術をも「保存科学」の立場から研究を進めている。

ここでは、日本での文化財の保存科学における文化財の保存環境に関する研究の位置付けを概観し、さらに、近年、特に問題となっている環境汚染が及ぼす文化財の保存環境への影響の評価に関する調査・研究の現状と重要性について紹介したい。

保存科学における保存環境研究

文化財の保存科学は、人類共通の遺産である文化財を後世に伝え、永久に保存し、活用するための「保存」と「修復」の両者に共通の基礎となる学問であると言われている。

関野 克氏（元・東京国立文化財研究所所長）は、「月刊文化財」（昭

和四十二年八月号）のなかで、文化財の保存と修復のための科学的研究

は、美術品の保存と修復のため必要が生んだ科学の領域で自然科学者と人文科学者の提携から出発し、この科学を文化財の領域まで広め文化財の保存科学と呼び、この文化財の保存科学を大きく①文化財の保存環境研究、②文化財の構造研究、③文化財の材質研究、の三者に分けた。このなかで、文化財の保存環境研究としては、光線、温湿度、空気汚染、微、虫害の項目を挙げている。

文化財の保存環境研究としての空気汚染に関する調査は、昭和三十一年に奈良正倉院外側観光道路新設が問題となり、自動車の排気ガス等が御物に影響を及ぼすかについての研究が最初である。東京国立文化財研究所保存科学部では、正倉院構内における大気汚染調査として二酸化硫黄濃度の測定、影響評価を目的として暴露試験（鉄粉、顔料、金属板）を行った。これを契機に、それ以後、現在まで、他の機関の協力を得て、

全国各地で空気汚染の経年変化と累積効果の調査を継続して行っている。

文化遺産の保存のために現状を調査し、手法を確立し、保存のための処理に努められた江本義理氏は、一九五一年にケリー（E. R. Carey）により提唱された“Archaeological Chemistry”（考古化学）の5項目（①古代の材料の成分に関する研究、②古代の材料、古文化財の劣化、分解と腐食に関する研究、③古文化財研究と展示のための保存と修復、④美術品の材料と技術の化学的研究、⑤美術品の偽物の鑑定）に加え、⑥考古学的遺物の埋蔵環境の研究、⑦発掘時よりただちに始まる劣化現象の研究、の2項目を加えた。

特に、⑦については出土直後から始まる、閉ざされた環境から空気中へという環境の激変による材質の劣化現象（変質）の研究を示し、出土時の環境調査と材質調査とその上での保存処置の必要性を説いている。

さらに、江本氏は、文化財の保存科学について、化学、物理、生物学を基礎として、動植物学、建築学、考古学、美術史学、工学、農学等の分野に関連した境界領域であり、その内容を①文化財の材質・技法に関する研究、②保存環境に関する研究、

③保存・修復処理に関する研究の三つに大別した。（「文化財をまもる」江本義理著、アグネ技術センター）。

特に、江本氏の保存科学における保存環境の調査・研究の重要性を説き、その一貫した研究姿勢——文化財の保存環境として、その特殊性を考え、その影響の実体を調査し、影響の度合いの判定方法、環境評価の考え方を確立する——は高く評価され、現在の保存環境調査の基本となっている。江本氏が指摘するように「かけがえのない文化遺産を代々受け継いできたわれわれである。軽微な影響と思われるも、その蓄積が現われる時が来る。手遅れは許されない。」のである。

当然、関野氏や江本氏の保存科学の内容に関する三系統の分類は、いずれも独立することなく三者が協力して、保存科学の目的である「文化財の保存と活用」に関する研究を進めてこそ成果が期待される。この意味においても保存科学の一役を担う保存環境に関する研究は重要であり不可欠のものであるといえるであろう。

保存環境とその影響

文化財保存科学の立場から環境問

題を取り上げたのは昭和二九年（一九五四年）からの岩崎氏による「博物館内の陳列室における塵埃の研究」からであるといわれているが、保存科学に視点を置いた材質に対する環境汚染の影響の研究は極めて少ない。この理由として、文化財の保存と活用（公開）という立場から文化財保存環境の問題を研究している門倉武夫氏（国立文化財研究所保存科学部）は、他の材料と大きく異なる特徴である文化財のもつ特殊性（文化財はそれを構成する材質の多岐性、これらを取り巻く環境の多様性、さらに長期に渡る年月を経過して種々の環境に晒されてきたことなど）をあげている。

門倉氏によれば、文化財を取り巻く雰囲気中何らかの原因で異現象が生じ、それによって文化財としての価値を損なう状況を生じたとき、この環境は汚染されているという。文化財の保存環境は、①自然環境、②社会環境、③保存・活用の場とした環境（主に屋内環境、活用環境、収蔵環境）、④埋蔵環境、とに大別することができる。このうち、社会環境は、人為的に起こされたもので、大気汚染、水質汚染、振動、産業活動、人口過密、道路、鉄道などが互

いに作用しあつて複雑な環境を形成しており、これが要因となり屋内環境にも影響を及ぼす。（酸性雨の科学と対策」溝口次夫編著、丸善）。

環境汚染と文化財保存

先に述べたように、文化財保存の立場から公害問題を取り上げたのは昭和三一年からの奈良正倉院の調査が最初である。汚染因子としての測定（この調査では二酸化硫黄の濃度）、材質に及ぼす影響評価に目的とする金属材料や顔料などの暴露試験、調査対象地域以外での比較のための観測地域の設定（この調査では東京国立博物館構内）など、「環境汚染と文化財保存に関する調査」の方法を模索しながら確立しようという姿勢がみられ、現在、一般的に行われている「文化財保存の立場からの文化財に対する環境汚染の影響評価法」の基礎的研究となり、今日まで継承されている。この意味において、正倉院構内の環境調査は高く評価される。

これ以後、江本氏や門倉氏などの研究グループによって精力的に「保存環境とその影響評価に関する研究」が行われてきた。例えば、①京都国立博物館の構内や展示室内、平等院などの各地の大気汚染濃度の測

定と金属テストピースの暴露試験、②奈良国立博物館の収蔵庫、展示室、展示ケース内、京都市三十三間堂、岡崎市大樹寺などでの文化財環境におけるふん塵（ガス汚染物質とともに文化財を汚損）に関する研究として浮遊微粒子の組成と挙動の検討、③神奈川県下の海岸から山岳地にかけて銅または銅合金（当然、文化財からの試料採取はできないので住宅の銅葺き屋根などから百件の試料を採取）に発生した錆中の陰イオン（炭酸、塩化物、硝酸、硫酸イオン）濃度の比較から大気汚染による文化財への影響評価について検討、④染織文化財に対する二酸化窒素の影響調査として、環境条件の異なる美術館、博物館の展示室、収蔵庫における、古代染料で染色した絹、木綿のテストピース暴露試験と同位置での二酸化窒素濃度測定、など興味深い研究がある。

最近、人間の生活環境は急速に汚染され人間の生存まで脅かす状態にまで悪化してきた地球規模での環境汚染問題は、人口の都市集中化、工業生産活動にともなう環境汚染や公害対策を無視した急速な工業化によ

る環境汚染など密接に絡み合いながら多くの影響する因子を作り出し、これらがすべて自然環境中に残留し、地球環境に悪影響を及ぼし始めている。つまり、社会環境が自然環境に加わり環境を大変に複雑にしている。このような状況のなかで、当然、文化財保存環境にも多くの影響因子となり文化財に多大な影響を及ぼすことが予想される。

一方、「環境科学」は、人間の生活はおろか、その生存を脅かすまでに至った環境破壊に直面したために、環境保護を目的として、これに関連する諸事象を研究する学問として生まれてきた。この環境科学の誕生は一九六十年代の後半（昭和四十年代前半）でその歴史は約二十数年と云われている。このように新しく誕生した環境科学は、かががえのない地球をまもるために、環境破壊の実態を把握し、その原因・機構を科学的に解明し、環境影響の予測を行い、その対策を進める。

現在、文化財の保存科学と環境科学の研究者とによる共同研究（例えば、大気環境学会における文化財影響部会）が開始され、文化財の材質の多様性、保存環境の解析・影響予測と対策に関する総合的な研究が行

わっている。このように新しく誕生した環境科学は、かががえのない地球をまもるために、環境破壊の実態を把握し、その原因・機構を科学的に解明し、環境影響の予測を行い、その対策を進める。

現在、文化財の保存科学と環境科学の研究者とによる共同研究（例えば、大気環境学会における文化財影響部会）が開始され、文化財の材質の多様性、保存環境の解析・影響予測と対策に関する総合的な研究が行

われ一定の成果を挙げ始めている。保存管理条件として考慮すべき事項などへの具体的な提言が行われるものと期待している。

これらの保存環境に関する研究成果を、保存科学の立場から史料管理の体系化の中にとどのように発展させていくかの研究の意義は大きい。特に、これまで環境汚染の史料への影響については指摘されているものの調査例が少ない。このために独自の具体的な研究が必要であろう。当然、史料の保存科学においても文化財での研究と同様に「非破壊での調査の鉄則」は厳守しなければならぬ。

おわりに、関野氏の「文化財の保存と修復に必要な科学的研究の調和ある発展のため研究施設の拡充とともに関係分野の人文並びに自然科学者、技術者の協体制を整えることが大切である」という言葉を意識して、今後とも「記録保存科学」というべき専門分野の構築に向けて関連する諸分野とのさらなる連携を深める努力を続けたいと考えている。

受贈図書 平成六年度 (二) (続き)

(一)内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。

小柏窯跡発掘調査報告書〔福井県〕織

田町教育委員会

越後五社丸漂民帰還記事―「天保雜記」

所載―〔木崎良平〕

松本市史第四巻 旧市町村編Ⅱ〔松本市〕

飯島町誌 上巻・下巻〔長野県飯島町〕

飛騨古川金森史―古川町の歴史と城下町

―〔岐阜県吉城郡古川町〕

飛騨古川金森史―金森家の一族と末裔―

〔同右〕

高山の町並〔平成元・三年版〕〔高崎市教育委員会〕

〔同右〕

高山の古地図―城下町高山の変遷―〔同右〕

〔同右〕

葦山町史 第六巻下〔静岡県〕葦山町史刊行委員会

〔同右〕

葦山町史別篇 資料集三〔同右〕

沼津市史叢書 第二集〔沼津市教育委員会〕

〔同右〕

沼津市史編さん調査報告書 第五集〔同右〕

〔同右〕

久能山東照宮傳世の文化財 刀剣編〔久能山東照宮博物館〕

〔同右〕

刈谷市史 第二巻〔刈谷市〕

豊橋市史々料叢書 三〔豊橋市〕

田原藩日記 第五・六巻〔愛知県〕田

原町教育委員会

三重県史資料編 近江Ⅰ〔三重県〕

尾鷲市史年表〔尾鷲市〕

彦根藩史料叢書 侍中由緒帳Ⅰ〔彦根城博物館〕

史料京都の歴史 14〔京都市〕

向日市埋蔵文化財調査報告書 第35・37・38集〔向日市教育委員会〕

河内長野市史 第1巻(上)〔河内長野市役所〕

〔同右〕

新修大阪市史 第七巻〔大阪市〕

大阪市史史料 第三十八・四十二集〔大阪歴史編纂所〕

〔同右〕

第6回歴史の華ひらく泉南シンポジウム

〔泉南市教育委員会〕

泉南市文化財調査報告書 第二十五集

〔同右〕

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成4年度〔泉佐野市教育委員会〕

〔同右〕

泉佐野市埋蔵文化財調査報告 26〔同右〕

〔同右〕

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 31

36・38〔同右〕

八尾市文化財調査報告 29・30〔八尾市教育委員会〕

〔同右〕

阪南市文化財状況調査報告書〔阪南市教育委員会〕

〔同右〕

〔同右〕

阪南市埋蔵文化財報告 XVⅠ・XⅧ〔同右〕

新修神戸市史 歴史編Ⅳ〔神戸市〕

姫路市史 第十三巻上〔姫路市〕

〔同右〕

福岡町史 第一巻〔兵庫県福岡町〕

赤穂塩業史料集 第六・七巻〔赤穂市教育委員会〕

〔同右〕

日女道かがみ昭和の大修理30周年記念誌

〔姫路市〕

和歌山県史 原始・古代・中世〔和歌山県〕

〔同右〕

紀州林業史資料〔真砂久一〕

総社市史 近代現代史料編〔総社市〕

新修倉敷市史 13〔倉敷市〕

〔同右〕

脇町史 別巻〔徳島県〕脇町

四国の辺路石と道守り〔喜代吉栄徳〕

四国辺路研究Ⅰ第2号〔同右〕

青山文庫図録―近世近代の日本と佐川―

〔高知県〕佐川町立青山文庫

〔同右〕

佐賀県近世史料 第一編第二巻〔佐賀県立図書館〕

〔同右〕

玉名市史 資料篇6〔玉名市〕

大分県先哲叢書 大友宗麟資料集 第三

―五巻―瀧廉太郎資料集〔全一卷〕

〔大分県教育委員会〕

西郷村史〔宮崎県〕西郷村

山田町誌〔宮崎県〕山田町

川南町文化財調査報告 5〔宮崎県〕川南町

〔同右〕

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第13

〔同右〕

ロンドン大学におけるアーキビスト養成課程

森本祥子

私は、一九九三年十月から翌年九月にかけての、ロンドン大学のアーキビスト養成課程に在籍した。コースの概要や、十二月までの一学期で学んだことについては、さきに全史料協「会報」の三十号（一九九四年三月）で紹介したので、重複をさけて、ここでは一月からの二、三学期に学んだこと、および、コースを修了して感じたことを中心で紹介したい。

コースでは記録のライフサイクルに沿って管理を考えるという方法をとっており、一学期には、記録の現用段階を中心に学んだ。一学期も終わりの頃に、半現用段階の記録の管理について学ぶところにさしかかったが、予定していたパブリック・レコード・オフィス（以下、PROと略記）のレコードセンターの見学が、センターでアスペクト問題が生じて中止されてしまい、残念だった。この見学がなくなったせいもあるが、半現用の記録についてあまり考える機会がなかったように思う。

二学期は史料の管理について学ぶことになっていった。二学期に設定されていた授業は、①文書館運営論、②リスト作成演習、③ガイド作成演習、④文書館実習である。一学期は毎日が講義の連続であったのにくらべ、二学期には講義は①のみとなり、個人で課題をこなす時間が中心となり、授業の様子はかなり様変わりした。

①の文書館運営論では、建物に関することや普及活動についてなど、施設としての文書館を運営するために必要な知識についてはひろく触れた。またその一環として幾度かPROを訪問しては、保存修復の現場を見学した。

②および③は、PROの史料を使って、リスト（目録）やガイド（所蔵史料の解説）を作成する練習である。まず②は、自国に関係のあるファイル三十点をえらび、PROの書式に従って、表題だけの目録、簡単な内容説明をつけた目録、詳細な説明をつけた目録、という三種類の目録を作成し、それぞれの長所短所を比較する、という作業だった。ファイル単位という大雑把な目録とりに初めは驚いたが、それぐらいの大きな単位での目録とりでなければ整理が追いつかないという現実的消極的な理由のみではなく、ファイル内容について利用者が想像する余地を残しておくことは、かえって利用の可能性を広げるのではないか、ということはこの作業を通じて考えた。

つぎに、③のガイド作成演習だが、これはかなり疑問の残る作業だった。PROのガイドというのは、試行錯誤を重ねた結果できた非常にすぐれたものであり、官庁の諸機関の歴史をまとめたパート1、レコードクラスごとの概要をまとめたパート2、そしてそれらへの索引のパート3の三部からなっている。③はこの形式に習熟することが目的の課題で、これは一年のうちで一番大変な課題だとさんざん脅されていたために皆でびくびくしていたが、要するにPROのガイドのうち、自国関係の部分を書き写せばそれで済むようだった。

私たちは、これをひそかに「コピー・プロジェクト」とよんで、ひたすらガイドの丸写し（多少は手を加える必要があったが）に励んだが、中に一人まじめな学生が丸写しを潔しとせず、きちんと史料を借りだして分析しつつ取り組んだところ、大変すぎて締切に間にあわず、おまけに体をこわしてしまった。

PROに日参し、リストやガイドを黙々と作成しつつ、二学期はほとんど終わった。しめくりは、一週間の文書館実習④だった。私は、ベアリング銀行に派遣されたが、それまで特に企業アーカイヴズに興味があったわけではなかったため、非常に不安だった。しかし、これは結果として最高の体験となった。ベアリングでは、現用のファイルから史料まで一貫して記録・史料管理部が管理している。各職員が、順番に自分の仕事をつきつきりで教えてくれたことで、それまで断片的な知識でしかなかった記録のライフサイクルを通じての管理というものを、ようやく実感として理解することができたのである。また、記録・史料を一貫して管理する最新のコンピュータシステムについて学ぶことができただのも、有意義だった。この実習については、終了後に学生が皆集まり、テーマ別の報告会をもって、体験の共有化がはかられた。

四月末からの三学期のはじめは、

学生全員での二週間の実践プロジェクトだった。以前は、外国人学生の有志が、アフリカ諸国で記録史料管理プログラムを整備するのに参加することで、それまで学んだ理論の実践を試みていた(「記録と史料」四号、六八ページ参照)。しかし、その費用を賄うために出資者を探すのがもはや容易ではないこと、および、イギリス人学生にも同様の機会を与えるべきではないかということ、前年度からこのような実習をおこなっているとのことだった。私達が任されたのは、ロンドン大学本部の地下倉庫で死蔵されている記録の整理で、管轄の部課に交渉して実際に記録を廃棄したり、手分けして目録づくりをして、最終的に倉庫にかなりのスペースをつくりだすことに成功したときは、とても嬉しかった。このプロジェクトに際しては、私たちはプロのアーキビストとして振る舞うよう、指導されていた。これは廃棄も含めて本当に大学の記録を整理するからである。私たちは、こうしてプロとして仕事することでアーキビストとしての自覚を強められた。

プロジェクトが終了すると、残されたのは修士論文作成のみだった。外国人学生は、これまで学んだことを帰国後の職場でどのように応用するかを考えて報告しあう機会が、二度あったが、基本的に授業はなくなった。しかし、ようやく一息ついているのは外国人学生だけで、イギリス人学生は、たったひとつとはいえ試験(古文書解説)があったし、その後は、履歴書づくりにあけくれた。イギリスでのアーキビストの就職状況はきびしく、もとの職場に復帰した学生をのぞくと、七月時点で正規の就職が決まっていたのは一人だけで、あとは半年とか数カ月とかの仕事のみつけるのがやっとならなかつた。私は、奨学金の都合で八月中に帰国しなければならなかったが、九月末の締め切りに何とか間に合うように郵送で論文を提出し、無事に課程を修了することができた。

課程を終えて、幾つか考えるところがある。まず課題と思われることに触れたい。外国人学生のコースは、英連邦の国レベルのアーキビストの再教育を想定したものである。しかし、一口に英連邦といってもアフリカと東南アジアでは事情がかなり違う。特に、教師陣のアジアに対する認識はかなり現実とズレがあり、たとえば、日本の事情の理解は教師陣が来日した一九八九年当時のままで、違和感を覚えた。大学側が、それぞれの国の事情をリアルタイムで把握し対応することは不可能だろう。しかし問題は、むしろそれぞれのバラエティーに富んだ現実に目をむけないまま、融通のきかない科目設定をしているところにあると思われる。また、個々の学生のニーズも多様である。これらのことを考えると、多少は選択科目があってもよかつたと思う。なお、最後に不満の残つたこととして、イギリス人学生にはアンケート用紙がくばられ、コースについて詳細に評価し意見を述べる機会が与えられたのに、外国人学生にはそのような機会が与えられなかつたことがある。

ひるがえって、イギリス人学生も含めたコース全体をみると、アーキビスト養成課程の存在意義は、アーキビスト達が共通の言語をもつようになるということに尽きよう。多様な経歴を背景に集まってくる学生達は、必ずしもはじめから同じアーキビスト像を持っていたわけではない。古文書中心の発想をする人、現用記録のことしか目のいかない人など、様々であつた。大学側でも意識してバラエティーに富んだ学生構成にしたという。それが、半年後には一緒にプロジェクトを遂行できるまでになつたのである。一見何でもないことのようにだが、指導者なしで、かつ二週間という短期間に成果をあげることは、整理の手順や記録の評価基準、目録の取り方などに、共通の理解がなければ不可能である。こうして、アーキビストは何をすべきかという根本的な部分を共有するようになることで、このち様々な職場に散っていても、アーキビストというひとつの職業としてまとまり、発展しうるのであろう。

報告

特定研究「記録史料の情報資源化と 史料管理学の体系化に関する研究」準備研究会

安藤 正 人

当館では、記録史料の科学的な保存利用体制の確立をめざして、従来より史料管理学の研究とアーキビストの養成に努めてきた。しかし、史料管理学の体系化を図るためには、関連諸分野の専門研究者との本格的な共同研究がぜひとも必要であることから、現在「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」と題する特定研究経費を予算要求している。この経費はまだ認められていないが、近い将来この特定研究が開始されることを見越し、一九九五年一月三〇日に、全国から文書館学、歴史学、図書館情報学など約二十人の研究者の参加を求めて準備研究会を開催した。史料館員以外の出席者は次の方々であった。

青山英幸(北海道立文書館)、浅古弘(早稲田大学)、石原一則(神奈川県立公文書館)、猪俣(倉沢)愛子(名古屋大学)、君塚仁彦(東京学芸大学)、芝村篤樹(桃山学院大学)、田中康雄(群馬県立文書館)、長倉美恵子(東京学芸大学)、永田治樹(図書館情報学)、中野等(福岡県立柳川古文書

館)、広瀬順昭(駿河台大学)、保坂裕興(駿河台大学)、水野保(東京都公文書館)、横山伊徳(東京大学史料編纂所)、吉井敏幸(元興寺文化財研究所)、吉見義明(中央大学)、渡辺佳子(京都府立総合資料館)。

研究会では次の四本の報告をもとに討議を行った(報告順)。

- (1) 安藤正人(史料館)「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化をめざして―特定研究の目的と課題」
- (2) 横山伊徳「史料目録のデータベース化について」
- (3) 大友一雄(史料館)「史料学の成果と課題―史料管理学の立場から」
- (4) 吉見義明「近現代史料の保存利用体制の整備のために―戦後50年とアジア太平洋の視点から」

安藤は主催者の立場から特定研究の研究計画について説明。次の五つの研究課題を設定して、海外とも情報交換を行いながらわが国独自の史料管理学の体系化に取り組みたいとした。①「史料管理史」(各時代の記録史料の性質と構造について史料学的観点から研究する)、②「評価

と収集」(現代記録管理論、記録評価選別論、史料調査法等を研究する)、③「整理と情報化」(記録史料組織法や史料情報データベースの研究を行う)、④「保存と修復」(記録媒体、保存環境、保存修復技術等についての科学的研究を行う)、⑤「文書館と専門職」(文書館等の史料保存機能における史料管理実務上の要請、諸外国のアーキビスト養成課程における専門職教育プログラム等を比較検討することにより、わが国に適合的な史料管理専門職のあり方と、その養成課程のカリキュラム編成について研究する)。

横山氏は、文書館等における目録データベース化の課題として、①文書の作成組織への歴史的理解と、②作成組織の歴史が反映した文書群の構造の呈示、をあげ、欧米公文書館における「カレント・ガイド」に学ぶ必要性を強調した。カレント・ガイドとは、「行政歴」、つまり文書群を生み出した組織の歴史を集大成したもので、欧米の公文書館第二世代システムの一つの根幹となっているものである。

大友氏は、史料管理学における史料学の課題は、「組織体の性質や歴史を知ることによって、(記録の)作

成・配布・受理・保管の過程についての学問的な分析が可能となり、ひいてはどのような整理が史料保存にとって適切であるか、を議論できるのである」といって安澤秀一氏の言葉に表現されているとし、組織体とその文書群構造についての研究など、いくつかの具体的研究課題をあげた。また近世を中心に最近の史料学研究成果を紹介し、その問題点を指摘した。

最後に吉見氏は、わが国の官公庁文書の公開状況が一般に極めて立ち後れていると述べ、利用者として経験した具体的事例を紹介しながら、無原則的・非科学的な非公開が広がっていると警告した。そして、情報公開法を制定して、五〇年以上経過公文書の全面公開と二五〜三〇年での原則公開などのルールを確立することが、近現代史研究のみならず日本の民主主義の発展のためにぜひとも必要だ、と強調した。

討論では、出席者全員から数多くの有意義な意見が出され、特定研究の開始に向けても大きな期待が表明された。今回の準備研究会出席者の方々はもとより、関係諸氏の幅広い御支援をお願いしたい。

特定研究「収蔵史料の修復・復元に関する基礎的研究」 研究会

青木 睦

史料館では、平成三年より史料の修復・復元に関する基礎的研究を行ってきた。その研究の概要は次の通りである。史料館で収蔵している史料の内、収集時点で一冊が二―五分割に断裁されていたり、虫喰・湿害等により損傷の甚しいものや、虫糞や水被りにより史料が板状になり剝離が困難なもの等々、現状のままでは利用に供することができないものがある。特に断裁された高島藩領村々宗門人別帳(約四五〇〇冊)は、寛文年間(一六六〇年代)から約二〇〇年間が揃っている。藩庁に伝存されたもので現存するものとして極めて稀少な史料である。本研究は、これら個々の史料の特質とその損傷状況に応じた最適な修復(虫損繕いⅡ部分修復、裏打ち・漉^リ紙^シ法Ⅱ全体修復、脱酸処置、綴直等)や復元方法とその技法について、館外の研究者及び専門家と共同で研究を行い、その成果に基づき具体的な修復・復元作業を実施しようとするものである。

史料の修復にとって重要なことは、

まず、その史料に修復を加えることの可否判断であり、次にその史料に最適な修復方法を研究し、選択することである。それには修復対象となる史料そのものについての材質・形態等、多角的な科学的分析・検討と研究が不可欠である。しかも、修復は史料の永続的保存を補償し得る状態とすると同時に、直接手に触れながら閲覧する反復の利用にも応じられなければならないものである。さらに、最小限の修復で簡便かつ経済的な方法を追求することが求められる。本研究は、近世以降の史料という、極めて残存量が多く紙質・形態が多様であることから、修復の必要性を原則として認められながらも等閉視されてきたものに対する研究としての意義をもっている。また研究の特色は、多様な紙質・形態を有する史料に最適な修復方法とその技法を研究し、具体的に修復を実施することにある。さらに、一部コンピュータを活用して、断裁された断片の同定作業を行い、効率化を図る研究も行うことである。

全国的に史料の修復・復元方法についての研究とその実際についての関心が高まっている現状から、本研究を進めることが緊急的な課題である。よって研究成果を報告書等で公表し、それらの関心に応えらるとともに、研究により確立された技術・技法の普及により、史料保存に対する正しい認識を広めることに寄与したい。

平成六年度には、館外の保存科学の専門研究者を集めた研究会を開催し、これまでの研究蓄積・実践内容について研究協議を行うことができた。この研究会は、平成七年二月―四日に開催し、全国から次のような研究者の方々の参加を得て行った。馬淵久夫(史料館客員教授・作陽短期大学)、真貝哲夫(東京芸術大学美術学部)、大沢真澄(昭和女子大学文学部)、高妻洋成(京都芸術短期大学文化財科学研究所)、西山要一(奈良大学文学部)、二宮修治(東京学芸大学教育学部)、松田泰典(東北芸術工科大学芸術学部)、村上隆(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、神庭信幸(国立歴史民俗博物館情報資料研究部)、増田勝彦(東京国立文化財研究所修復技術部)、山内章(元興寺文化財研究所

保存科学センター)

研究会の内容は、これまでの研究について、青木睦が「史料の保存修復の基礎的研究の目的と課題」と題して報告し、高島藩宗門帳の断裁史料の復元と修復方法の実践内容を説明し、そこでのコンピュータ活用による成果をまとめた。さらに、この報告において、史料の修復方法として着目されている漉紙法や水損史料の復元に用いられた真空凍結乾燥法などの実施状況について取りまとめた。今後の保存修復の課題として、洋紙史料の酸性紙の劣化問題、脱酸処理の現状、およびインクの劣化、褪色、こんにやく版・青焼・ジアゾコピー等の劣化、油性・染料インクの色移・色移・変色の問題等々、今日の課題について提起し、研究討議の素材をあげた。

研究協議においては、大量の史料群の保存方法・技術についての共同研究の重要性、実践に向けた考古資料の修復技術の応用や開発のあり方、保存科学者との協力のあり方等意見がかわされ、具体的な修復・復元作業に生かされる成果が得られた。

神戸家所蔵犬山屋神戸家文書の保管容器について

— 犬山屋神戸家文書目録(その一)を刊行して —

渡辺浩一

昨年度筆者は、史料館所蔵史料目録第六十一集として『尾張国名古屋元材木町犬山屋神戸家文書目録』を編集した。それに伴って、現在の神戸家が所蔵している文書についての調査を行ったので、この場を借りて気付いたことを報告したい。

史料館所蔵の神戸家文書は全部で一万五千〜二万点に達するものと推定しているが、そのほかに現在の神戸家にもかなり多量の文書が所蔵されていることが今回確認できた。それはマンションの一階倉庫に保管されており、保管容器は全部で一一(A、K)、その内訳は木箱八、葛籠一、紙袋一、段ボール箱一である。このうち最も注目すべきは、Iの葛籠(外形寸法五四〇×三四八×一五八mm)であろう。この葛籠の蓋裏には

①文化十二年乙亥五月吉祥日

犬山神戸氏

呂 (花押)

②此□□堅吾殿江ゆつり

という二つの貼紙がある。②の堅吾とは神戸家七代目文左衛門茂元のこ

能性が高い。

とであり、文政七年(一八二四)生まれであるから、②の貼紙の方が確実に新しい。次に蓋の側面の二箇所に

③浄仙様・普海様御遺墨

④神戸新田開発当時帳面

の二種の貼紙がみられる。③と④は異筆であり、④は他の木箱に見られる昭和一三年(一九三八)の貼紙と同筆のように見える。③は近世の字体のように見え、浄仙様とは初代当主文左衛門安政、普海様とは二代目当主文左衛門正種で彼は神戸家の経営基盤である大宝前新田(のち神戸新田と改称)の開発者である。

ところで、この葛籠のなかみは、

横長帳の包三つを主とする。そのうち二つの包の表書には、

(あ) 浄仙様勘定古帳

(い) 普海様勘定

とある。

下書請弘古帳共入

(あ)の包紙はすでに開封されていたが、(い)の包紙は密封されたままで、包まれた時点の帳面相互の物理的位置関係がそのまま保存されている可

(あ)の包装のなかの史料は、天和・貞享期(一六八〇年代)の有物勘定帳であり、包紙表書および葛籠の貼紙③の記載と一致している。したがって、(い)の包紙の中は二代目の時期の決算帳簿であることが予想される。

有物勘定帳は経営全体を把握する帳簿であるから、経営帳簿の体系のなかでは最も重要な帳簿である。しかも、貼紙②からはこの最重要帳簿を入れた葛籠が、当主から跡継ぎの者へ引き継がれたことを示している。

このように神戸家にとって最も重要な史料、経営帳簿体系の頂点に立つという意味と、創業者と神戸新田開発者の二人の時期の帳簿という二重の意味で最も重要な史料は、明白に他の史料と異なる保管形態で管理されていたということが出来る。保管容器にわざわざ引継文言が記されること自体、他の神戸家の史料と比較して特殊な扱い方をしているといえないだろうか。

このほかにも、現在神戸家所蔵している神戸家文書の保管容器からは史料管理にかかわる重要な情報を引き出すことができる。例えば、Cの帳箱(外形寸法四一三×三〇八×二八五mm)は、中身は明治期の服岡

新田関係史料と昭和一〇年代の名古屋市豊田土地区画整理組合史料の合計約一〇〇点である。しかし、蓋の側板には二ヶ所に「御小納戸御用」との墨書があり、あきらかに近世段階で作られた帳箱である。神戸家文書のなかの由緒書からは神戸家が名古屋藩のさまざまな御用達を勤めていたことがわかり、それにかかわる帳箱なのであろう。そうした役割に

関連する史料は、神戸家の地主・商業経営の諸史料とはきちんと区別されていたことがわかる。そのため専用の箱を用いていたのである。このようなことを神戸家への訪問で知り得たため、整理作業が全体の四分の一程度しか進んでいない現段階で、名古屋藩御用達に関わる史料を数点しか見いだしてはいても、「目録」の図2にあるように、「領主御用」というサブグループ、および「小納戸御用」というシリーズを設定することが出来るのである。保管容器への注目は、史料の整理を迅速かつ的確に行うための有益な情報をも提供しているのである。

このように史料の保管容器からは様々な貴重な情報の抽出が可能であり、現状記録のメリットの一つということができよう。

受贈図書 平成六年度 (二) (続き)

(一)内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。

- 茨城県立歴史館蔵書目録
鷹見家歴史資料目録〔古河歴史博物館〕
栃木県史料所在目録 第23集〔栃木県立
文書館〕
群馬県郷土資料総合目録 追録13〔群馬
県図書館協会〕
群馬県立文書館収蔵文書目録 12〔群馬
県立文書館〕
群馬県行政文書簿冊目録 第6集〔同右〕
大間々町誌〔基礎資料Ⅳ〕〔群馬県
大間々町〕
群馬県史収集複製資料目録 第1集〔同
右〕
我孫子市史資料目録 11〔我孫子市教育
委員会〕
幸手市史調査報告書 第6集〔幸手市教
育委員会〕
豊後岡藩中川家文書目録〔菅原憲二〕
明治大学所蔵内藤家文書増補・追加目録
(3)〔明治大学刑事博物館〕
国分寺市史資料目録(Ⅲ)〔国分寺市〕
塩業関係資料仮目録 第12集〔日本たば
こ産業株式会社〕
豊島区立郷土資料館収蔵資料目録 第七
集
東村山市史調査資料 第一集〔東村山市
史編さん室〕
杉山文庫目録〔足立区立郷土博物館〕
竹内道敬寄託文庫目録 (その五)〔国
立音楽大学附属図書館〕
慶応義塾所蔵高橋誠一郎浮世絵コレクシ
ョン目録〔慶応義塾大学三田メディア
センター〕
東京大学史料編纂所所蔵宗家史料目録
高幡山金剛寺文書目録〔法政大学多摩図
書館地方資料室〕
〔品川神社〕古文書目録・金石文目録〔南
博〕
武蔵国豊島郡角答村名主渡辺家文書目録
〔新宿区教育委員会〕
神奈川県関係新聞記事索引 第32集〔神
奈川県立図書館〕
茅ヶ崎市史資料所在目録 (8)〔茅ヶ崎市〕
平塚市資料所在目録 第6集〔平塚市博
物館〕
寒川町史資料所在目録 第9集〔〔神奈
川県〕寒川町〕
寒川町新聞記事目録 第6集〔同右〕
横浜市史資料所在目録 近・現代第4集
〔横浜市〕
伊勢原市史資料所在目録 5〔伊勢原市〕
郷土資料目録〔逗子市立図書館〕
横浜市歴史博物館資料目録 第1集〔財
横浜市ふるさと歴史財団〕
新潟県公文書簿冊目録 第1集〔新潟県
立文書館〕
富山県行政文書目録 第3集〔富山県公
文書館〕
大田栄太郎文庫目録〔富山県立図書館〕
五郎兵衛新田古文書目録 第6集〔長
- 24集〔えびの市教育委員会〕
都城市文化財調査報告書 第26・27集
〔都城市教育委員会〕
木城町文化財調査報告書 第4集〔宮
崎県〕児湯郡木城町教育委員会〕
鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四・
玉里島津家史料三〔鹿児島県〕
奄美史料24〔鹿児島県立図書館奄美分館〕
沖縄県史料近代5・6〔沖縄県立図書館〕
具志川市史 第二卷〔具志川市教育委員
会〕
具志川市史編集資料 2・4〔同右〕
青森県立郷土館収蔵資料目録 第4集
酒田市立光丘文庫所蔵大川周明旧蔵書目
録〔酒田市立図書館〕
成田山仏教図書館新着図書目録 第76号
大蔵経関係研究文献目録〔立正大学東洋
史研究室〕
神奈川県立図書館・神奈川県立川崎図書
館増加図書著者・書名索引 1992
〔神奈川県立図書館〕
間宮文庫図書解題〔富山県図書館協会〕
金沢大学理学部論文および著書目録
No 7
受贈民俗資料分類目録〔滋賀県 栗東
歴史民俗博物館〕
- 大阪府立中之島・夕陽丘図書館増加図書
目録 平成4年度〔大阪府立中之島図
書館〕
大阪商業大学逐次刊行物総合目録 19
93・3月現在〔大阪商業大学図書館〕
市立函館図書館郷土資料分類目録 第11
分冊
釧路市立博物館収蔵資料目録 (XIV)
北海道立文書館所蔵公文書件名目録 9
小樽市立博物館所蔵資料目録 12
苫小牧市博物館所蔵資料目録 8
高畑利宜文書目録〔滝川市郷土館〕
置換済文書リスト〔札幌市役所行政管理
課〕
八木橋文庫目録〔弘前市立図書館〕
古文書近世史料目録 第16号〔山形大学
附属博物館〕
諸家文書目録 X〔鶴岡市郷土資料館〕
諸家文書目録 I〔酒田市立図書館・酒
田市立光丘文庫〕
寒河江市史資料所在目録 第5集〔寒河
江市教育委員会〕
歴史資料館収蔵資料目録 第23・24集
〔福島県文化センター〕
郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第8集
史料目録 34・35〔茨城県立歴史館〕

野県 浅科村教育委員会

長野市立博物館収蔵資料目録 歴史2

吉江悦郎氏所蔵古文書目録〔塩尻市誌編纂委員会〕

小松俊介氏所蔵古文書目録〔同右〕

柳澤貞夫氏所蔵古文書目録〔同右〕

一ノ瀬芳人氏所蔵古文書目録〔同右〕

青木文雄氏所蔵古文書目録〔同右〕

岐阜県所在史料目録 第34・35集〔岐阜県歴史資料館〕

岐阜県行政文書目録 昭和47年度編〔同右〕

岐阜県史料調査報告書 第15号〔同右〕

雲橋社関係目録〔高山市郷土館〕

沼津市明治史料館史料目録 15

富土市史料目録 第5輯〔富土市〕

静岡県榛原郡金谷町所在文書目録 第5集〔金谷町役場〕

小島文庫目録〔熱田神宮宮庁〕

正眼寺文書目録〔愛知学院大学附属図書館〕

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目録 第四十三集

高島町史料所在目録 第1輯〔滋賀県高島町歴史民俗資料館〕

京都府資料目録追録 No.10〔京都府立総合資料館〕

岩崎英精文庫目録〔京都府立丹後郷土資料館友の会〕

大阪市行政刊行物目録平成5年度版〔大

阪市公文書館

大阪府行政資料・刊行物目録 第3集〔同右〕

大阪商業大学商業史研究所資料目録 第2集

神戸市立博物館蔵品目録 考古・歴史の部 9・10 地図の部 9・10 美術の部 9・10

箕面市地域史料目録集 五〔箕面市役所総務部〕

資料調査報告書 第21集〔鳥取県立博物館〕

三木家文書目録〔近世〕〔出雲市立図書館〕

広島市公文書館所蔵資料目録 第17集・第18集

広島市行政資料目録市政資料編 追録8〔広島市公文書館〕

山口県文書館地方調査員調査報告 21

山口県文書館蔵行政資料目録 2

山口県文書館諸家文書目録 1

九州大学文化史研究所所蔵古文書目録 十八・十九〔文化史研究施設〕

福岡県立図書館収集文書目録第三・四輯

鳥原市本光寺所蔵古文書調査報告書〔中村質〕

北海道開拓記念館一括資料目録 第26・27集

福島県西会津町史資料目録 第6集〔西会津町〕

〔中福阿弥陀堂文書目録〕並びに〔中福

村生国並宗門改帳〔川越市立博物館〕

豊田本自治会保管文書目録〔同右〕

今福山口家文書目録〔同右〕

光西寺松井家文書目録〔同右〕

川越市立博物館収蔵文書目録 (一)~(四) 収蔵文書目録 第六集〔千葉県文書館〕

日の出町史料所在目録 第五集〔東京都日の出町教育委員会〕

横浜関係人物検索図書目録〔横浜開港資料館〕

小山町史料新在日録 第18・19集〔静岡県〕

名古屋市博物館蔵品目録 第3分冊

大阪府立中央図書館蔵品目録 第22巻

行政資料目録 追録第2号

大賀文書目録第十一次調査分〔太宰府市〕

収蔵品目録 9〔福岡市博物館〕

柳川古文書館史料目録 第6集〔九州歴史資料館分館柳川古文書館〕

徳重区有文書〔追加分〕〔福岡県立図書館〕

熊本研究文献目録 人文編IV〔熊本県企画開発部文化企画室〕

北海道立文書館史料集 第九

人口減少期の高島アイヌにおける家構成員の流動性のメカニズム―天保5〜明治4年―〔遠藤匡俊〕

釧路叢書 第30巻〔釧路市〕

概説松前の歴史〔北海道〕松前町

弘前藩の刑法典 (十七)〔橋本久〕

津軽藩の敦賀蔵屋敷と廻米制について

〔印牧信明〕

青森県立郷土館調査報告 第33・34集

盛岡藩雜書 第七卷〔盛岡市中央公民館〕

岩手県立博物館調査研究報告書 第十冊

東北歴史資料館資料集 35・36

宮城県図書館の貴重書〔一般古書編〕

鹿角市史資料編第二十六集〔鹿角市役所〕

山形市資料第81号〔山形市〕

新庄市史編集資料集 第22号〔新庄市教育委員会〕

梁川町史10〔福島県〕梁川町

西会津町史 第4巻(上)〔福島県〕西会津町

茨城大学附属図書館郷土資料双書1~(四) 日立製作所と地域社会II〔日立市郷土博物館〕

近世後期の年貢関係史料について〔渡辺尚志〕

ふるさと小山市の指定文化財〔小山市立博物館〕

太田市史通史編近現代〔太田市〕

大間々町誌 別巻4・7〔基礎資料III〕

〔群馬県〕大間々町

三郷市史 第五巻〔三郷市〕

三郷市史資料 地誌1〔同右〕

朝霞市史調査報告書 第十一集

伊奈町史資料調査報告書 第十集〔埼玉県〕北足立郡伊奈町

鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書 第6集

〔鳩ヶ谷市教育委員会〕

中世石造遺物調査概報(2)〔埼玉県立歴史資料館〕

松戸市史 史料編(六)〔松戸市立図書館〕

君津市史 史料集IV〔君津市〕

鎌ヶ谷のあゆみ(改訂版)〔鎌ヶ谷市教育委員会〕

鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書 IV 印西町史料集 近世編一〜三〔千葉県〕印西町〕

船橋市市内遺跡発掘調査報告書 平成5年度〔船橋市教育委員会〕

大田区の文化財 第30集〔大田区教育委員会〕

大田区の埋蔵文化財 第14集〔同右〕
東京都古文書集 第二二巻〔東京都教育庁〕

歴史の道調査報告書 第二集〔同右〕
府中市郷土資料集15・16〔東京都〕府中市教育委員会〕

武蔵野国豊島郡角筈村名主渡辺家文書 第1・2巻〔新宿区教育委員会〕
南伝馬町名主高野家日記言上之控〔東京都公文書館〕

江東区資料 牧野家文書一〔江東区教育委員会〕

第一回江戸東京たてもの園セミナー〔近世の住まい〕報告書〔東京都〕江戸東京博物館分館江戸東京たてもの園〕

杉並資料集録 寺院明細II〔杉並区教育委員会〕

文化財シリーズ 39〔同右〕

杉並区の指定登録文化財 平成4年度〔同右〕

江戸川区の文化財 一九九四〔江戸川区教育委員会〕

下野毛遺跡III〔世田谷区教育委員会〕

野毛大塚古墳II〔同右〕
平成5年度港区指定文化財〔東京都〕港区教育委員会〕

港区文化財調査集録 第2集〔同右〕
港区内近世江戸関連遺跡発掘調査報告書 15〜17〔同右〕

ふるさと国分寺のあゆみ〔国分寺市〕
茅ヶ崎市史 現代7〔茅ヶ崎市〕
藤沢市史料集(十八)〔藤沢市文書館〕

小田原市立図書館郷土資料集成 7
寒川町史調査報告書 4〔神奈川県〕寒川町〕

資料集横浜鉄道一九〇八〜一九一七〔横浜開港資料普及協会〕
学童集団疎開の記録〔秦野市〕
藤沢市教育史 史料編第二巻〔藤沢市教育委員会〕

福井市史 資料編9・11〔福井市〕
都留市史資料編 近世II〔都留市〕

「草莽の志士」型豪農と村・地域(抜刷)〔渡辺尚志〕
明治三年の「職員録」〔原島陽一〕
内陸地域文化の人文科学的研究I〔信州大学人文学部平成5年度特定研究班〕

信濃郷原氏譚〔郷原誠〕
各務原市資料調査報告書 第十七号〔各務原市歴史民俗資料館〕

碑文をたずねて―〔岐阜県歴史資料館〕

細江町史 資料編8〔静岡県〕細江町〕

小山町史 第三巻〔静岡県〕小山町〕
森町史 資料編二〔静岡県〕森町〕

図書館叢書4〔浜松市立中央図書館〕
沼津兵学校の群像〔沼津市明治史料館〕

沼津市歴史民俗資料館資料集11
諏訪原城跡〔静岡県〕金谷町教育委員会〕

神戸家文書〔愛知県〕十四山村教育委員会〕
二川区有文書〔豊橋市二川宿本陣資料館〕

東海地方の情報と社会〔名古屋大学出版会〕
半田の気候環境〔半田市〕
写真で見る半田の祭りIII〔同右〕

大王町史・(同)資料編〔三重県〕大王町〕
平松素文書17〔津市教育委員会〕

雨森芳洲関係資料調査報告書〔滋賀県教育委員会〕
滋賀県大般若波羅蜜多経調査報告書二〔同右〕

滋賀大学経済学部附属史料館研究彙報 第39〜41号
平等院庭園発掘調査概要報告 II〔宇治市教育委員会〕

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第22号

24集〔同右〕
羽曳野市史 第七巻〔羽曳野市〕
羽曳野資料叢書7〔同右〕

貝塚市郷土資料室事業報告 平成元〜5年版〔貝塚市教育委員会〕

奈良に関する文化地域学的研究一九九三〔奈良女子大学〕

平城宮発掘調査出土木簡概報(2)〔奈良国立文化財研究所〕

海南市史第一巻〔海南市〕
鳥府志図録〔鳥取県立公文書館〕

瀬戸内海の船図及び船大工用具〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕

福岡県史 近世史料編福岡藩御用帳(一)・細川小倉藩(二) 近代史料編福岡県地理全誌(五) 文化史料編盲僧・座頭 通史編福岡藩文化(下)〔福岡県〕

柳河藩の近世干拓―史料と解説―〔九州歴史資料館分館柳川古文書館〕
金烏山樹林院 西方寺誌〔西方寺〕

糸島地方酪農業協同組合五十年史
雷山・野呂育成牧場開設20周年記念前原酪農振興組合20年の歩み

高田大和バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集(同) 史料編〔福岡県教育委員会〕

館蔵品図録1〔北九州市立歴史博物館〕
水巻町文化財調査報告書 第2集〔福岡県〕水巻町教育委員会〕

五和町史 史料編(其の一)〔熊本県〕

五和町

野尻町文化財調査報告書 第6集〔宮崎県〕野尻町教育委員会

高崎町文化財調査報告書 第5集〔宮崎県〕高崎町教育委員会

門川町文化財調査報告書 第1・2集〔宮崎県〕門川町教育委員会

南日本文化研究所叢書19〔鹿児島短大付属南日本文化研究所〕

「南九州の地域性と文化を語る」―郷土と共に生きる知恵を―〔鹿児島県歴史資料センター黎明館〕

新沖縄県史編集に関する基本計画〔新沖縄県史編集検討委員会〕

東洋学研究における研究者用マルチメディア情報(同)(別冊・追加報告)〔京都大学大型計算機センター〕

北海道開拓記念館常設展示改訂事業報告公文書館公開制度運用状況(昭和63年度)平成4年度運用状況編)・(同答申編)〔大阪市公文書館〕

40年のことども〔山形大学附属図書館20年のあゆみ〕〔千葉県立安房博物館〕

北海道博物館等施設ネットワーク事業報告Ⅳ〔北海道開拓記念館〕

図書寮叢刊 砂嶽・九条家本玉葉1〔宮内庁書陵部〕

報徳博物館資料集2〔報徳福運社報徳博物館〕

物館

熱田神宮文化叢書第九〔熱田神宮宮庁〕

明代西南民族史料―明実録抄―第二冊

〔東洋大学アジア・アフリカ文化研究所〕

伊能忠敬作「日本全図」(伊能図)の所在と現況について〔渡辺一郎〕

三井事業史 本編第三巻中〔三井文庫〕

租税資料叢書・第七巻〔国税庁税務大学校租税資料室〕

友愛の旗のもとに 友愛青年連盟40年史

〔日本友愛青年協会〕

統計資料シリーズNo44・47〔一橋大学経済研究所日本経済統計情報センター〕

外国人労働者と地域社会〔同志社大学人文科学研究所〕

中央大学史資料集 第十二集〔中央大学広報部大学史編纂課〕

立命館百年資料集 第二集〔立命館百年史編纂室〕

九州大学大学史料叢書 第2輯〔九州大学大学史料室〕

成城大学民俗学研究所20年の歩み・(同)資料〔成城大学民俗学研究所〕

諸国叢書 第十一輯〔同右〕

「衆鱗図」と栗本丹洲の魚介図〔磯野直秀〕

石炭研究資料叢書 No15〔九州大学石炭研究資料センター〕

馬の文化叢書 5〔馬事文化センター〕

芭蕉記念館所蔵本「蕉門奥秘」二十五ヶ条

〔江東区芭蕉記念館〕

農村舞台探訪〔角田一郎〕

三重県史料調査報告書 IX〔三重県江戸時代の船橋周辺―船橋市郷土資料館〕

五所川原市史 文化財編〔五所川原市田沢湖町史資料編 第1・7・10集〕〔秋田県〕田沢湖町

上方参りの記(復刻版)〔谷地恒夫私の雑記帳〔中田玲子〕

栗盛吉右衛門翁伝〔栗盛章介〕

彙報

○平成七年度史料管理学研修会(第四一回)の開催

本年度の長期研修課程は、前期が平成七年七月三日～七月二十八日、後期が平成七年九月四日～九月二十九日の日程で、東京会場(国文学研究資料館)にて開催された。短期研修課程は、平成七年一月六日～一月一七日の日程で、広島会場(瀬戸内宛)において開催される(受講者は決定済み)。

○国文学研究資料館夏期公開講演会(第一八回)

「杉浦梅潭と幕末・明治の漢詩人たち」を共通論題として五月二十九日に開催され、その一つとして当館教授鈴江英一が「廻浦と開拓」のテーマで講演した。

○原典講読セミナー(第三回)

本年八月二日～二五日の五日間開催され、史料館教授鈴江英一が「函館洋教事件・一八七二―一八七五」のテーマで三コマを担当した。

○評議員会と運営協議会の開催

平成七年六月二十九日に運営協議会、七月一二日評議員会がそれぞれ開催され、教官人事・管理運営について評議ないし協議された。

○私学研修員の受け入れ

神奈川県立短期大学部助教授 田島佳也氏

期間は平成七年四月一日～同八年三月三十一日まで。研究課題は「近世日本漁村史・漁業史の研究」。

○COEの指定

国文学研究資料館は今年度より「卓越した研究拠点(Center of

中田儀直―その人と時代―〔中田玲子〕

人をつくり人につくす〔栗盛章介〕

角館の武家屋敷 川原田家〔角館町教育委員会〕

秋田城跡〔秋田市教育委員会〕

米沢市史編集資料 第27号〔米沢市〕

福島県文化財調査報告書 第77集〔福島県教育委員会〕

(以下次号)

Excellence」に指定され、それにと
もない、史料館では中核の研究機関
研究員一名を採用した(後述)。

○文部省科学研究費補助金の交付

・総合研究A「幕藩領主文書と村方

・町方文書群の発生・展開並びに伝

存に関する史料学的研究」(代表森

安彦)に三年計画のうち一年目とし

て、三三〇万円が交付された。

・国際学術研究「在英日本史料の所

在と現状に関する調査」(代表森安

彦)に二年計画のうち一年目として

七〇〇万円が交付された。

・重点領域研究・人文科学とコンピ

ュータ「諸藩江戸屋敷のネットワー

クー大名家文書複合化の研究」(武

井協三・大友一雄・福田千鶴)に一

四〇万円が交付された。

・研究成果公開促進費「史料所在デ

ータベース」(代表森安彦)に一四

〇八万円が交付された。

・一般研究C「北海道・沖縄県その

他島嶼における特別町村制およびそ

の先行形態の自治体制度史の研究」

(代表鈴江英一)に二年計画のうち

一年目として、八〇万円が交付され

た。

・奨励研究A「近世都市における町

共同体の比較的研究」(代表渡辺

浩一)に一〇〇万円が交付された。

・特別研究員奨励費「近世・近代期
の地域社会と村落行政―文書管理史
の視点から―」(代表富善一敏)に
八〇万円が交付された。

○館内研究会

【第一四五回】平成七年六月二〇日

史料管理学研修会講義準備報告

近世史料論Ⅱ(村の史料)

高木俊輔

史料調査論 渡辺浩一

【第一四六回】平成七年六月二二日

海外所在日本史料調査の準備状況

について 森本祥子

【第一四七回】平成七年六月二九日

史料管理学研修会の今後

鈴木英一

○出版物の刊行

『蚕の村の洋行日記』(丑木幸男著、

セミナー原典を読む5)を平成七年

七月に平凡社より刊行した。

○人事異動

・採用

史料管理研究室(四月一日付)

客員教授(作陽短期大学)

馬淵久夫

客員助教授(東京学芸大学)

二宮修治

COE非常勤研究員(五月一日付)

講師 森本祥子

史料館の

学術雑誌が閲覧できます！

史料館では、史料目録、地方史誌につ
いで、所蔵している各種の学術雑誌を公
開しています。閲覧が出来るものは、
『地方史研究』など約1200タイトルです。
学会誌はもちろんのこと、自治体史編纂
にかかわる研究誌を多く取り揃えており
ます。どうぞご利用下さい。著作権法に
抵触しない限り複写することもできます。
雑誌の公開についてのお問い合わせは、
情報閲覧室(内線511)へ。

平成八年度史料管理学研修会(通産
四一回)の開催予定
長期研修課程

国文学研究資料館 東京会場

前期 八月七日―七月二六日

後期 八月九日―九月二七日

短期研修課程

長野県長野市

八月十一日―十一月三日

(前・後期、短期とも最後の二週間
はレポートの作成にあてる)

史料館報 第六三号

平成七年(一九九五)九月三十日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒四 東京都品川区豊町一ノ六ノ二〇

電話〇三(三三八九五)七三二(代)

FAX〇三(三七八五)七〇五一

〒二二 東京都台東区寿三―五

有 限 公 司 ス ミ ダ

電話〇三(三八四二)七三三三